

中学校「修了論文」における体系的なN I E実践報告

盈進中学校 上山 朋子

本校では独自教科「読書」（週1時間）という授業を設けて今年で32年目になる。ここでは中学3年間の前半で心を育む「集団読書」、後半で生徒一人ひとりの興味関心に応じて問題解決を図る「修了論文」に取り組むプログラムを16年間続けている。また、2020年度からは、高校学習指導要領において必修化された「探究（総合的な探究の時間）」（週1時間）を中学校でも開始し、「読書」と「探究」の2つの授業を効果的に連動させながらキャリア志向型の問題解決能力の育成を目指している。

「読書」の授業で中心となるメディアは言うまでもなく「本」であるが、「探究」活動においては「本」以外のメディアも欠かせない存在となっている。情報を入手する手段としては「インターネット」の即時性や情報量も有用だが、今やほとんどの中学生が所持するスマホとタブレットを用いた情報収集では情報へのアクセスがピンポイントとなり、彼らの興味関心や視野をさらに広げるようなアプローチが難しい。そこで本校では「探究」活動の中で新聞を用いた活動を意識的に取り入れてきた経緯がある。

中学3年間における学びの流れとNIE



これまで中学1年生～2年生の「探究」では同年代の生徒が書いた投書欄を活用したり（ヤングスポットに挑戦）、1つの新聞記事を家族と話し合ったり（いっしょに読もう新聞コンクール）、新聞記事に対する自分の考えを書いたり（新聞感想文に挑戦）することで、新聞に馴染みのない生徒も新聞というメディアに親しむことができるようなプログラムに取り組んできた。2年生後半以降「平和学習」と「キャリア学習」の学びを深めるため、新聞感想文や新聞切り抜きなどNIEを継続的にこなしている。

今回は本校において「探究」と並ぶ学びの柱である「読書」の取り組みの最後に位置する修了論文作成のステップに体系的にNIEを取り入れる実践を試み、本リポートで報告させて頂くこととする。

1 修了論文とは

本校では中学2年生の終わりに沖縄学習旅行に行き、そこで疑問に感じたことをもとに「沖縄ミニ論文」を作成する。これが「修了論文」の第一歩であり、その後各自の興味・関心・キャリア意識に基づいて担任との面談をおこない、そこでそれぞれのテーマを定めていく。

中学3年生になるとテーマに沿った疑問について仮説を立てた上でその検証をおこない、4000字以上の「修了論文」を書くことになっている。この検証は書籍を3冊以上用いること、また夏休み中にフィールドワークを実施してその結果をもとにおこなうことを条件に課している。

なお、およそ1年間かけて取り組む「修了論文」は、校長以下校内の全教職員が分担してその個別指導にあたることになっている。



(修了論文執筆風景)

さらに、論文完成後は、これから「修了論文」に取り組む後輩の前でプレゼンテーションをおこなう。「修了論文」は先輩から後輩へと受け継がれていく学びの1つになっている。



(プレゼンテーション大会の様子)

ちなみに、今年度の中学3年生は「修了論文」において以下のようなテーマ選んだ。

- 描画療法の効果
- 偏食と発達の関係
- 水道水の安全性
- 泥美容とその効果
- 速乾性インナー
- 手書きの効果
- モーツアルトの生涯と作風
- 爪と健康の関係
- 日焼け止めと環境問題
- 算数嫌いと数学嫌い
- 畳のリラックス効果
- 再生医療の可能性
- 各国の性教育比較

(一部紹介)

2 NIEの計画

「修了論文」作成にあたって、新聞をどのように活用するかについて以下の4点を計画した。

- (1) テーマ選びの段階における新聞活用
- (2) 論文内容を充実させるための新聞活用
- (3) 論文内容をもとにした「新聞感想文」および「新聞切り抜き」への発展的取り組み
- (4) 論文内容をもとにして「新聞投書欄」を用いたまとめ活動

「修了論文」はその執筆に約1年間を要する非常に長いスパンの学びであるため、その過程において、これまで「探究」で取り組んだNIEを継続していくことを前提とした計画を立てることにした。これまでの学びをもう一步深める学びにするためには、新聞を複数の機会で利用する体系化を目指す必要があると考えた。

3 NIEの実践

それでは上記の計画に基づいて、新聞を活用した「修了論文」執筆の具体的な実践の様子について1つずつ振り返ってみたい。

(1) テーマ選びの段階における新聞活用

「修了論文」の執筆において、最も重要なカギを握るのがテーマであることは間違いない。テーマ決めのステップで毎年最も苦戦している現状が見られた。というのも、中学2・3年生の生徒にとって自らの「興味・関心」の対象は、ゲームや漫画、ペットや所属するクラブ活動など、すぐに身近なものしか思い浮かばない生徒がかなり多いのだ。さらに残念なことに、興味のあることや疑問が何も思い浮かばない生徒も一定数存在する。

こうした中、「医者や看護師などの医療従事者になりたい」と考えるような、早い段階で自分の夢が明確に定まっている生徒はすぐに「医療問題」をテーマに決める傾向が高い。その中でも「ガン」などは毎年生徒が飛びつきやすいテーマである。近年では「AI」なども生徒が好むテーマで、パソコンやプログラミングの得意な工学系の生徒などはよく選ぶとする。

しかし、安易な気持ちで選んだテーマでは実際のところ、モチベーションの維持が非常に難しい。1年間かけて取り組む論文であるため、もっとじっくり自己を掘り起こしてテーマと向き合ってほしいという思いもある。そこで、それぞれの生徒の興味・関心を広げるために、まずは新聞を用いて興味深いトピックを拾い上げていくという作業から進めていくことにした。



初めは大きな新聞をどう持つて読めばいいのか、指先にぎこちない感じが漂っている。



思い切って切ってみると、意外と楽しい。これを数回繰り返していくと、徐々に新聞にも慣れてきた。

まずは、社会の中にたくさんあるいろんなジャンルのトピックを見つけること、そこから始めることでテーマ探しのハードルは随分下がったように見えた。記事を読んでいくと、なかなか面白いものもあることに少しずつ気付いていく。



クラスのみんなで協力して集めた記事を見ながら自分が本当に取り組みたいテーマを決めていく。クラス全員がテーマをいったん決めたあと、それを共有した上で再度切り抜き作業をするときさらに効果的だった。「〇〇君のテーマの記事があったよ〜」「この記事もらっていいかな？」というやり取りが始まっていき、記事がどんどん集まっていくのである。自分1人で切り抜きの作業をすると、目的の記事に巡り合うのはなかなか至難の業であるが、クラス全員で取り組むとこうしたメリットも発見することができた。

(2) 論文内容を充実させるための新聞活用

テーマを決めるという第1段階を突破すれば、まずは一安心だが、そのテーマにどういった視点で切り込んでいくかという「修了論文」の中身を考えていく際にも新聞を活用したいと考え、さらに切り抜きを続けていくことにした。

【生徒の記録より】

読書の授業で新聞の切り抜きをしました。将来お菓子業界で新しいお菓子の開発をしたいと考えている私は今回の修了論文のテーマを「ガム」に決めていました。新聞を探していたら、友だちが「ガムとグミについて書かれたいい記事があったよ」と記事を切ってくれました。最近ではガムよりもグミが好まれる傾向があるというものでした。この理由の背景を考えるのも面白そうです。(抜粋)



中国新聞 (セレクト)
5月26日 (金) 付

「オーガニックコスメの安全性」について論文執筆する生徒が読んだ記事。中国新聞のセレクトには中学生の知的好奇心を刺激する記事が多いことを今回改めて思い知らされた。テーマ選定の初期段階にも活用できると考える。



中国新聞 (セレクト) 5月24日 (水) 付
牛肉のおいしさの差異を調べる生徒と、昆虫食を調べる生徒が論文に生かせる内容だと選んだ記事。このように複数のテーマが交錯する記事もある。

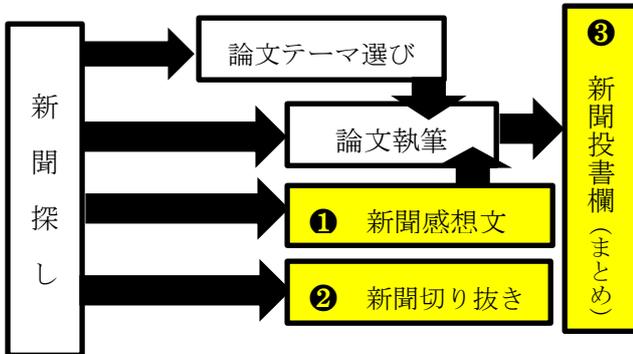


中国新聞 (セレクト)
6月3日 (土) 付

この記事は「インソールの効能」について論文執筆をおこなった生徒が読んだ記事。新聞記事でその分野の最先端の研究開発についても知ることができる。

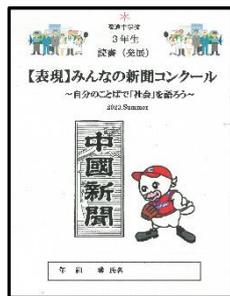
(3) 論文内容をもとにした「新聞感想文」および「新聞切り抜き」への発展的取り組み

生徒たちの多くは集めた新聞記事をファイルに綴じて、その都度「修了論文」執筆の材料としていく流れができたが、せっかく集めた記事を有効活用して発展的取り組みを行いたいと考えた。



① 新聞感想文

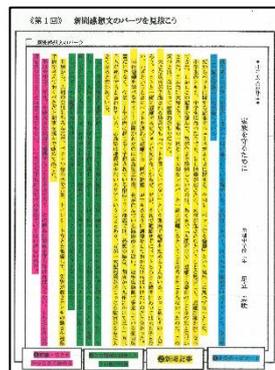
1つの新聞記事をもとに自分の体験なども交えながら3枚の原稿用紙に考えをまとめていく「新聞感想文」は中学生の「書く力」を鍛える上で非常に有効である。本校では十数年前から中国新聞社主催「みんなの新聞コンクール」の「新聞感想文の部」に挑戦することでNIEを継続している。今回は中学3年生が「修了論文」のために集めた新聞記事についての「新聞感想文」を書くという、取り組みの連動を図ることで、「修了論文」の活動にもさらに深まりを持たせることができた。



本校では3枚の「新聞感想文」を書く上でのステップをワークシート化しており、まずは型に沿った書き方を指導している。



過去の入賞作品で型を用いるとより効果的だった。



その後推敲を重ね、より伝わる文章の書き方について添削を入れながら3枚の完成を目指す。中学生にとって3枚というのは非常に丁度いい鍛錬の場になる。

② 新聞切り抜き

中国新聞「みんなの新聞コンクール」には他にも「新聞切り抜き」部門もある。本校ではこれまで社会科がその取り組みの中心を担ってきた。今回の実践にあたり新聞7紙の提供を頂いていたチャンスを生かし、この「新聞切り抜き」にも挑戦することにした。

今回は本校中学3年生の読書部の生徒4名が「本や図書館、読書」についての新聞記事を協力的に集め、その新聞をもとに4人で協議してテーマを4つに分け、新聞を分配するという方法でおこなった。(写真は新聞集めの様子)



- テーマ① すべての人が「読める」世界へ
- テーマ② 図書館はだれのため？
- テーマ③ 一体どうなる！？未来の本屋
- テーマ④ 本のある暮らし～紙の本の未来～

これまで社会科の夏休みの課題として課されてきたので、作成する過程を見ることはなかったが、今回生徒たちが記事をレイアウトしてそこにコメントをつけていく姿を見ていて、この取り組みにはさまざまな力が問われていることを改めて知ることができた。構成力や文章表現力、そこにアーティスティックな感性も必要となり、莫大な時間を要した。1枚の台紙を完成させたときの生徒たちの達成感に満ちた表情は忘れられない。



生徒たちの作品は入賞3名、佳作1名という結果だった。なお、佳作の生徒は読書をテーマにした「新聞感想文」にも挑戦し、そちらでは入賞を頂くことができた。さまざまな切り口で新聞を活用し、考えを深めることができたと言えよう。

(4) 論文内容をもとにして「新聞投書欄」を用いたまとめ活動

③ 新聞投書欄

およそ1年間かけて執筆した「修了論文」も1月末でほぼ全ての生徒が清書まで漕ぎつけることができた。これまでの取り組みのまとめとして各自の探究活動について「新聞投書欄」に投稿する形でまとめることにした。「新聞投書欄」は中学1年生の時にも取り組んだ経験があるので、上のワークシートを用いて書くように指示すると、一斉に鉛筆を走らせる姿があった。

吃音探究 自己理解深める

中学生 渡邊 日輝 15歳

中学校3年間の探究活動の集大成として修了論文を書いた。言語障害、とりわけ僕自身も抱える吃音という問題について、自己理解を深めるとともに、多くの人に広く知ってもらうために取り組んだ。

書籍やインターネットで吃音について調べていくと、驚きの連続だった。いくつもの原因論が存在すること、言語障害だからその問題や配慮があることが分かった。

また、自身も吃音があり、吃音治療と研究に当たる九州大病院の菊池良和医師に手紙を送り、吃音の最新の状況などを手紙やメールで質問した。特に吃音の研究では脳や遺伝子、薬物療法について行われていることが印象に残っている。吃音の人々のサマーカーンブにも参加させてほしい。

この論文活動を通して吃音に限らず、障害や個性と社会のあり方について考えることができた。菊池医師も語る「いいんだよ」の社会の必要性を切に感じた。そんな社会を実現するための一里塚になりたい。(福山市)

(中国新聞 ヤングスポット2024年1月22日朝刊)

1番最初に掲載されたのは、自身が抱える「吃音」を論文のテーマに選んだ生徒だった。彼は「吃音」についての本を読み、新聞記事を集め、そこで存在を知った吃音ドクターの菊池医師に手紙を書いてインタビューさせて頂くフィールドワークをおこなった。そして「中国新聞みんなの新聞コンクール」新聞感想文を書き、中学生の部で最優秀賞を受賞した。「修了論文」を起点にして新聞を大いに活用しその学びを深化させた好例である。

(中国新聞
2023年11月16日朝刊)

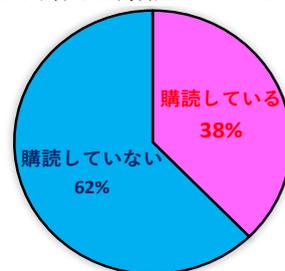


4 実践のまとめ

◆新聞の購読状況◆

実際に新聞を手に取り読んでみると、意外と興味深い話題が提供されていることに気付かされる生徒も多く、読みふける生徒も多く見られた。文字だけでなくカラフルな写真やイラストも多いこともあって、思った以上に抵抗感なくNIEに取り組んでいるようだ。論文のテーマに沿った記事も、クラスを越えて探し合うことでそれぞれの手元にたくさん集まった。しかし、こうした授業の場を用意しなければ、中学生が新聞を手にする機会は本当に少なくなってしまう。インターネットやスマホの普及によって、新聞購読する家庭も年々減少しつつある。この実践をおこなった中学3年生の生徒(119名)に新聞購読についてのアンケートをとり、集計すると以下の結果となった。

【家庭で新聞を購読していますか】



まず、新聞を購読している家庭が38%という現実に驚かされる。全国平均のデータは全国世論調査等でも公表されているが、実際に目の前の生徒たちの状況として数字をとらえ直すと、新聞の利用環境は極めて厳しい状況下にあると言える。

実際学校の授業で新聞を扱いたいと考えても、3分の2の生徒の家庭では購読されていないので、持ち寄ることも切り抜き作業をおこなうことも難航を極める。せつかくの良質な学習教材も、社会の変化に伴い学校教育での運用が困難に陥っているというのは残念でならない。

次年度はNIE実践指定校2年目。現在中学3年生の彼らも高校生となり進路開拓の道を歩むことになる。今後もNIEを活用した新しいプログラムを用意し、さらにその歩みを確かなものとしたい。最後に新聞を活用することの意味について考えさせられる記述を引用して締めくくる。

まず、習得しなければならないのが、あらゆることの基盤となる語彙力である。一般的には十二歳くらいまでに約二万語を覚えるとされており、日常生活で主に使うのは三〇〇〇語程度と言われている。ちなみに新聞で一年間に使用される言葉が約三万語であり、頻出するのが一万五〇〇〇語なので、中学生くらいから新聞を読むことができるようになる。(石井光太『ルボ 誰が国語力を殺すのか』(文藝春秋))

新聞には学びの活用価値がまだまだあるはずだ。

